東方好嫌意

小町通

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方好嫌意

【Ｎコード】
Ｎ８６４１Ｔ

【作者名】
小町通

【あらすじ】
俺は漫画やゲームが好きだ。
いきなり何を言い出すかと言うと、これはあらすじだから。
もちろんインターネットも嗜む。
そんな話ではない、欲しい漫画の新刊がでたので直ぐさま買い、読んでいると。

俺は寝ていた、ここまでなら、ただの堕落した生活態度なのだが。

少し続きがある、寝ていた場所が湖の辺だった。

こうすると、れっきとしたオチが付くのだ。

これはある世界に飛ばされた、一人の青年の物語である。

―トウホウスキキライ―

東方好嫌意―トウホウスキキライ―

俺は確かに部屋で漫画を読んでいた、俺は確かに部屋に居た。
…はず

「こんなところに何故居るんだ」

俺の部屋は湖の辺では無いはずだ。
その湖は霧がかかり、薄暗く、寒く、気味が悪い。

「あんた！　あたいの遊び場に何の用！？」

俺に話し掛ける彼女も、空を飛び、寒く、気味が悪い。

何故？何故、空を飛んでいるのだろう？
何故、俺の靴は凍り付いているのだろう？

うわっ
そう、声にならない悲鳴を上げた。
「勝手に遊ぶなんて、許さないんだから！」

そう言った彼女は氷柱を…
いや氷の塊を放つ。

『放つ』という言葉は、少しおかしいかもしれないが、彼女の手から投げた訳でもなく、彼女の手からありもしない氷の塊が放たれたのだ。

避ける事の出来る速さではあった、だが俺の靴は凍りつき微塵も動こうとしない。

しかし、中々どうして氷の塊は俺には当たらなかった。

「あんたねぇ…いきなり人間を襲わないの」

先ほど放たれた氷の塊らしき物は、周りに破片となって散らばっている。

「れいむ！　だってこいつ、あたいの遊び場で勝手に遊んでるから！」

別に遊んでた訳じゃ…

そう言いたいにも、口が塞がらない、口が空いているなら声も出るはずなのに。

「はいはい、そんなに怒ってると溶けるわよっと」

レイムと言う彼女は俺の方を向き、靴に付いた氷を取り除いてくれた。

「で、貴方の言い分は何かしら」

その時の、妙な微笑が何か嫌に怖かった。

―ハクレイノミコ―

「俺は…寝ていた？」

わからない事を聞かれると、答えにも疑問符が付く。
恐怖も入り混じり、顔が引き攣っていただろう。

「ここで？　嘘が下手ね、身寄りは居るのかしら？」

レイムは皮肉混じりに聞く。

「…今のところ、顔見知りは君達だけかな」

レイムは呆れている、後ろの空飛ぶ氷の少女なんて、首を傾げている。
首を傾げたいのはこちらの方だ。

「…とりあえず、神社で引き取るわ」
そして俺の手を掴むと、空高く飛び立つ。

「ちょっ…おま」
「じゃーなー！れいむー！」

俺の声は、虚しく掻き消された。

「貴方、飛ぶのは初めて？」
レイムは笑いながら話す。

「それは…人間は飛ばないからな」

さっきの皮肉を返す。

「嫌ね、最近の人間は飛ぶのよ」

驚きの新事実だ、俺も飛べるのだろうか？

そんな戯言を交わしていると、神社につく。

「よっと…一応言っておかないとね」

レイムは礼をする

「博麗神社へようこそ」

―ゲンソウキョウ―

ここまでの流れから言うと、レイムは……
「博麗の巫女なのか？」

「そうねぇ、ただの巫女では無わよ」

どういう事だ？そう俺は首を傾げた。

「さっき飛んで見せたでしょ？あれが私の能力よ」
能力？また俺は首を傾げる、レイムは呆れ気味にこう言った。

「貴方……もしかして『外』から来たのかしら？」
外？流石に三回目は無いだろうと、俺は腕を組む程度で止めた。

「……本当は慧音が一番早いのだけど、丁度良いとこに紫がいるわ」
そういって誰もいないはずの場所に札を投げる、危ないわねと声が聞こえてきた。

「貴女がそんなに喧嘩っ早いとはね」
何も無いはずの空間から、淑女と言う言葉が似合う女性が『出てきた』

「厄介事に巻き込まれれば、誰でも不機嫌になるわよ」
早く説明してやんなさい、と札を構えるレイム。

「私は八雲紫、『むらさき』と書いて『ゆかり』ですわ」
紫は律儀にお辞儀をした。

「所で、貴方妖怪や幽霊を信じるかしら？」

「ここに来る前は全く信じてなかった、が今の状況なら胸を張って信じるよ」

紫はクスッと笑い、真顔になる。

「さぁ、幻想郷へようこそ、住民になる前に簡単なレクチャーをするわ」

それから幻想郷という土地、いや世界の成り立ちや。

『程度の能力』の説明を受けた。

そういえばレクチャー中、余りにも暇なので中途半端だった漫画を思い返すと、手にあの漫画を握っていた。

紫によると『程度の能力』が働いたらしい、人間が能力を持つのは珍しい事では無いらしい。

少し、ここの生活の活路が見えてきた。

―アタラシイセカイ―（前書き）

短い

ーアタラシイセカイー

「あぁー、やっと終わった」
レクチャーは小1時間続いた。
しかも、全てが初めて聞くような事だったりするので、大変疲れる。

「お疲れ様、もう日がくれるわ。　家に泊まんなさい」
霊夢がお茶を出してくれた。

「あぁ、もうこんな時間か……」
この世界に来た日が終わろうとしている。

「まったく、紫ったらやるだけやってそのまま帰るなんて」
そんな霊夢の愚痴は聞こえていなかった。

この世界に来た日が終わる。
終わってしまう。

もし終わってしまったら、もう帰れないのだろうか。

家族は居なかったが、あの世界には俺の生きた印がたくさん残っている。

それはどうなるのだろうか？
ただの行方不明者で終わるのだろうか？
この世界に俺の生きた印は刻めるのだろうか？

頭では、この世界を理解し受け止めたはず。
しかし心は理解せず突っぱねた。

俺は弱い、だけどもこれは良い弱さなのではないだろうか。

俺はポジティブに物を考える癖があった。

この世界では癖ではなく、武器になってくれそうだ。
そう考える事にした、いつか心は少し少し理解し、ちょっとづつ受け止めてくれるだろう。

やはりポジティブとは凄い物だ。
胸が軽くなる。

「ちょっと、どうしたの？　いい歳して泣くんじゃないわよ」
霊夢に言われるまで、自分が泣いていた事に気付かなかった。

ポジティブも万能では無かった。

―オナマエナアニ？―（前書き）

こちらも短い

―オナマエナアニ？―

「あれ？　泣いていたのか……」
俺は手の甲で頬を拭った。
「……まぁ、あんたが不安なのも解るわ。　けど、全て背負うんじゃなくて思い切って捨てるのも、力よ」
霊夢は柄でもない、と神社へ戻って行った。
霊夢も心は優しいし、力もあるのだろう。
「さてと、俺も頑張らなくちゃな」
余計な物は捨ててしまう事にする、もっと軽くするために。

―――――――――――――――――――――――――

「そういえば、あんたの名前聞いてないわね」
霊夢がご飯を食べながら話す。

「あー、いろいろあってそのままだったな」
俺は味噌汁を一口のみ、自己紹介する。

「砂沙軒(スナサノキオ)夫変な名前だけど気にするな」
まぁ、この名前で困った事はないが。

「砂沙……　どっかで聞いたことが……」
霊夢が考え込んでしまった、特別変なことはしてないんだが。

「おーい、霊夢ご飯冷めるぞ」
ついに箸まで置いてしまった。
霊夢を食卓まで戻す。

「あぁ、ごめんなさい。　何でもないわ」
そのあと、ずっと霊夢は考え込んでいたが。
俺に出来ることが思い付かなかったので、放置しておくことにした。

紫が「面白い名前ね」と、いきなり隙間から出てきてからかってきたのは、余談である。

―ゲンソウノハジマリ―

「んっー……」
涼しい青空の下、青年が屈伸を始める。

「よし、始めるか」
懐から出したのは、カセットテープ。
ラジカセにカセットテープを入れ、再生ボタンを押す。

＞さー、今日も元気に行きましょう。＜
ラジカセからは、元気のいい声が流れて来る。

「いっち、にー、さん、し」
緩やかに体をほぐす。

「ごー、ろく、しち、はち」
体が軽くなっていく。

「にっ、にー、さん、し」
徐々に、体温が上がるのがわかる。

＞ラジオ体操、これにて終了！　今日も良い一日を！＜

「ふー、やっぱり気持ちが良いな」
ラジオ体操を終え、神社に向かおうとすると。

「軒夫、早起きね」
霊夢が欠伸をしながら、”寒い”朝の青空の下へ出てくる。

「あぁ、日課だからな」
今の季節は冬、しかし長い長い冬。

――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――

朝霧のかかった湖の向こう。

少しくすんだ紅い館が違和感をブレンドしている。

門の前には、マフラーを巻き縮こまる赤毛の女性が身震いしていた。

「うぅ……　今年は冷え込むなぁ……」
門番である彼女は、門番の仕事をするため。
ほぼ毎日、外に出ている。

そんな彼女が、暦を確認するのに使っているのは、雪解けや紅葉等の風景。

そのため、この冬が”異常”に長い事に気が付いていない。

「暖かい紅茶なんか、飲みたいなぁ……」

ゲートキーパー、君に幸あれ。

―ゲンソウノハジマリ―（後書き）

東方妖々夢へのフラグ。
紅魔館組、初登場は紅美鈴さんでした。
紅魔郷でも無いのに不思議！

以下、今後ネタバレあり注意。

今回、完璧で瀟洒な人は主人公と入れ替えられます。
あれ、紅魔館組空気（ピチューン

それでは次回をお楽しみに。

―ゲンソウノフユハナガイ―（前書き）

すいません！
東方妖々夢まだ始まりません！
どうしてこうなった

―ゲンソウノフユハナガイ―

「さて、軒夫」
ちゃぶ台を囲み、暖かいお茶を啜る霊夢。
「あぁ、わかってる。　もう5月だ」
耳が少し赤くなっている軒夫。

何故、日付の話をしているのか。
と言うと、あのラジオ体操の後にさかのぼる。

「……そっれにしても。　こんな寒い中、よく体操なんてするわね」
霊夢は身震いする振りをして、苦笑いする。
「言っただろ、日課だって」
苦笑いを返す。

軒夫は親父の寒風摩擦に影響され、手軽に出来るラジオ体操に手を出した。

冬の朝に、親子揃って寒風摩擦とラジオ体操は中々にシュールだったらしい。

「まぁ、本当ならラジオ体操は終わってるんだけどなぁ」
冬と夏はラジオ体操、秋と春はランニング。
そう日課を変えてきた軒夫には今の冬の長さは、死活問題に等しい。

「もうそろそろ、５月ね」

「そうだな」

チラチラと白い綿毛の様な雪が降ってくる。

はぁ……

二人揃ってため息を漏らした。

――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――

雪が降り始めた頃。

少しくすんだ紅い館。

白と紅とでなんとも幻想的な風景になっている。

「はぁ……　またですか？」

この館の門番である、紅美鈴はため息を漏らす。

白い息が漏れる。

「うぅ……　雪のせいでより冷えますね……」
クシュン
美鈴はくしゃみをしながらも、手をすり合わせたりして少しでも体温を上げようとしている。
「あぁ……　寒すぎて視界が歪んできますよ……　って、え？」
次の瞬間、美鈴は雪へとダイブした。
ドサリ
ゲートキーパー、君に幸あれ。
「異変よねぇ……」
「だろうな……」
ところ変わって、博麗神社。
ストーブに当たりながら呟く二人。
「そろそろ、あいつが来ても良さそうなんだけど」
「あいつ？」
「魔理沙よ、こういうのには真っ先に首を突っ込むんだけど……」
流石の魔理沙も寒さには勝てないのね。
苦笑いしながら、お茶を啜る。
「誰が、寒さに負けただって？」

そこには、黒い尖んがり帽子に金髪、白いエプロンとＴＨＥ魔女な女の子がいた。

「あら、来たのね魔理沙」

「おう、けど流石に寒いから中に入れて欲しいんだぜ」

それもそうで最近、霊夢は断熱材がわりに結界を張っているので。むやみやたらには入れない。

「あんたが来たらすぐに行こうと思ってたんだけど？」

「良いじゃないか、新人紹介ならぬ恋人紹介くらいしてくれたって」

軒夫を指差しながら魔理沙はニヤッと笑う。

「なっ……」

「はぁ！？」

霊夢はお札を構えながら震えている。

軒夫もそれにつられ、立ち上がる。

「まぁーりぃーさぁー？」

「異変よりこっちの方が大変だぜ」

二人が寒空の下、弾幕ごっこを始める。

「って……　異変は？」

軒夫の疑問は、白い息となって消えた。

―ゲンソウノフユハナガイ―（後書き）

美鈴の書きやすさは異常。

―イヘンゴビョウマエ―（前書き）

アッルゥエー？
まだ始まらないなぁ？
これは異変では無かろうか。

―イヘンゴビョウマエ―

霊夢と魔理沙の弾幕ごっこは霊夢の勝ちに終わった。
まぁ、魔理沙は途中で手を抜いていたが。

「おーい、終わったかー？」
手を振りながら、魔理沙が落ちた所へ歩み寄る。

「やれやれ、霊夢は少し耐性を付けるべきだぜ」
魔理沙は体に付いた雪を掃いながら笑う。

「もうっ……　まぁ良いわ、運動して体も暖まったでしょ」
行くわよ。
短く言って、空へ飛び立つ霊夢。

「この期に及んで、照れ隠しとは……　うぶだぜ」
魔理沙は霊夢がお札やら針を構えたので、冗談そこそこに軒夫に話し掛ける。

「よし、そこの、乗るか？」
「砂沙軒夫だ」
「軒夫、乗るか？」

少なからず、軒夫の顔が不安に曇る。
軒夫は痩せ型とは言えず、普通の二十代男性の体型だ。

「大丈夫、軒夫一人どうってことないぜ」
魔理沙が明るく言い放つ。

まぁ、良いか。
軒夫は自分にそう言い聞かせ、魔理沙の箒にまたがった。
「かっ飛ばすぜ！」
かっ飛ば、くらいで軒夫の視界は歪んだ。
「うおおおおおういいいい」
軒夫の絶叫は良く冷えた空へ、綺麗に吸い込まれた。

ここは紅い館。
紅と白が合わさる中、一つ何かが足りない。
そう紅美鈴である。

「うぅ……　はっ！？　ここどこですか！？」
その美鈴が起きた部屋は、紅魔館の一室。
「あら、起きたの？」
いつの間にかいた十六夜咲夜は、紅い紅茶を入れている。
「はひっ！？　咲夜さん？　あれ、何で……」
わたわたと回りを見渡し、少しでも今の状況を探ろうとするが。
直ぐに無駄だとわかり、咲夜に問い掛ける。
「あの……　咲夜さん……　なんで私、ベットで寝てるんでしょう？」

「あなた、風邪よ」
簡略化されすぎた、返答に美鈴は苦笑いをする。
「それで私は倒れたと……　武人が健康管理も出来ないとは……不覚」
嘆く美鈴の前に、紅茶が出される。
「さあ、飲みなさい。　暖まるわよ」
美鈴は少し涙目になりながら、紅茶を飲む。
「美味しいですぅぅぅ」
今にも泣き出しそうな、美鈴。
「大袈裟ね、あなた。　まだ安静にしてなさいよ」
咲夜は少し笑っていたような気が美鈴にはしていた。
ゲートキーパー、君に幸あり。

―フユヲカケルショウジョ―（前書き）

短い。
原作セリフとかいっぱい入れてみたいですね。

ーフユヲカケルショウジョー

「やっちゃったぜ」
「あぁ……　もうお前、最高に最悪だよ……」
体の中が、二、三回掻き回された様な感覚が晴れない。
と言うのも、魔理沙が死ぬほど飛ばして霊夢を見失った。
「んで、どうすんだ。　俺は休みたい」
「んじゃ、早く霊夢を探そうぜ」
「なんだ俺のことが嫌いなのか」

「まちなさい！」
そこには俺が初めてあった少女がいた。
「わりぃな、急いでるんだ。　速攻で終わらすぜ！」
恋符【マスタースパーク】
耳をつんざく様な音と共に目の前が真っ白になる。
「おおッ！？」
「げッ！」
少女はその白に飲み込まれていく、何処かでピチューンと聞こえた気がした。
「完ッ勝！　やっぱパワーだぜ！」ガッツポーズをとる魔理沙、後ろでげんなりしている軒夫。

「なぁ、俺もう疲れ」
「くろまく〜」
ドアノブカバーを被り、白と青を基調とした服を着た、青い髪の女性が上機嫌で飛んで来る。
「黒幕がお出ましだぜ」
「もういいや……」
軒夫は周りの雪景色の様に白くなっている。
「あなたたち、冬を終わらせたいの？」
「モチのロンだ、こうも寒いと雪だるまになっちまう」
「どちらかと言えば凍り付けだろ」
軒夫を無視し会話は進む。
「ふぅん、あなたたちで作る雪だるまも良いかも。」
「材料は私達じゃなくて、その辺を駆け回ってる犬にしたらどうだ？」
「あぁ、こうなるなら神社で猫になっていれば良かった」
ストーブが恋しい。

―フユヲカケルクロマク―（前書き）

難産でした。
弾幕を文章にするのって難しい。

ーフユヲカケルクロマクー

「私はレティ・ホワイトロック」
「私は霧雨魔理沙だぜ」
軽い挨拶を終える。
「さて……」
「自己紹介も終わった……」
二人は構える。
「行くわよ？白黒」
「行くぜ！忘れ物！」
「……俺は……？」
さながら置物だ。
軒夫を置き去りに、レティは周りに霧を発生させる。
「へへっ、私から視界を奪うなんて出来ないぜ」
魔理沙はレーザーを放ち、霧を払う。
が、霧から氷のつぶてが放たれる。
中々のスピードだ、魔理沙は右に左に避けていく。
魔理沙は余裕だが、後ろの軒夫は氷が掠ったり、揺さぶれたりかなりげんなりしている。
ある程度、避けていくと霧が薄くなる。

「そこだぜ！」
「ちっ！」
魔理沙が放ったレーザーにレティが被弾する。
寒符【リンガリングコールド】
レティがくるりと一回りすると、白い鳥が現れる。
「ふふふ、これでどう？」
その鳥はこちらに近づいてくる。
「自機狙いなんてどってことないぜ」
引き付けて避ける。
「それだけじゃないわよ」
レティは無造作に氷の弾をばらまく。
その弾は自機狙いの鳥と鳥の間を縫うように、かつランダムに飛んで来る。
「こいつは厄介だ」
「あぁ、後どれくらい揺れるんだろうな」
二人の考えの違いはあれど、厄介なのは同じらしい。
「よっ、ほっ、はっ」
ひょいひょいと魔理沙はかわしていく、逃げ道を塞がれないように前に向かっていく。
「ちょッ、ゆれてッ、あぐッ」
後ろの軒夫はお構いなしに。

「弾幕が薄くなってきたぜ！」
ここぞとばかりに魔理沙がレーザーを撃ち込む。
「避けきれないっ！　キャッ」
―Ｓｐｅｌｌ　ｃａｒｄ　Ｂｒｅａｋ―

「勝ったぜ！」
魔理沙はガッツポーズをして決める。
「ひどいわー、痛いじゃない」
レティはヨロヨロと、こちらに飛んで来る。
「勝ったから、冬を終わらせるんだぜ」
「私に言うのはお門違いよ、黒幕だけど犯人じゃないわ」
「まて、話がややこしい。　レティは犯人を知っているのか？」
軒夫がレティに問い掛ける。
「知らないわ、暖かい方にでも行ってみたら？」
そういうとレティは何処かへ飛んで行った。

―マヨヒガノカイネコ―（前書き）

携帯止まったり、遠出したりで大変遅れました。
もう十月ですよ十月。

―マヨヒガノカイネコ―

「ここどこかしら…？」
魔理沙達が黒幕と戦っている時、霊夢は道に迷っていた。
いつもなら持ち前の勘で進んでいくのだが。

「幻想郷にこんな所あったかしら」
少し古びた家がぽつぽつと並んでいる、廃村のようだと霊夢は失礼な事を考える。

「ちょっとーーまったぁ！」
目の前に現れたのはネコミミにしっぽと明らかに人外な出で立ちの少女。

「なによ。私は急いでいるの」
口ではこう言っているが、ちゃんと止まる霊夢。

「ここが何処だか分かっているの？人間」

「さぁ？」

ふふん、と胸を張る少女。

「ここはマヨヒガなのだ！人間が来るところでは無い！」

「あっそ、じゃあ帰るわね。出口はあちらかしら」
得に興味もなさ気に霊夢は飛んでいこうとする。

「ちょっとまって！出口も無いよ！何たってマヨヒガだから！」

「入り口は時には出口になるのよ、覚えておきなさい」
霊夢は呆れながら飛んでいく。

「あー！もう！本当は入り口も無いのにー！何できたの人間！」

「私が聞きたいわよ！退治するわよ！」
霊夢が札を構える。　と

「おやおや、物騒だな博麗」
もふもふが現れた。
霊夢はまたもや失礼なことを考える。

「藍、貴女はここが何処だか解るの？」
だからマヨヒガだー！
と後ろで化け猫が叫んでいるのを無視する。

「ここは紫様の住んでいるマヨヒガだ、別名”迷い家”迷うとここに誘われる。紫様も人払いの結界くらい貼っているから、普通は入れないだろうに」

私の勘は、面倒な方に傾いていたみたい。
そう霊夢は思いながら、藍にお茶を頼み紫を待つことにした。

何だか紫が絡んでいるような”勘”を感じたから。

―ヘブンズドア―（前書き）

短いですね。
ちょいとはしょった感じですが、今後のため致しかた無し。

しかし、完全に主人公の能力解説とかのタイミングを逃した。
まぁ、予定としてはもう一つ用意してあるんですが。

そうすると主人公死んじゃうかも、大丈夫かこれ。

ー ヘブンズドアー

「なんだが、違和感が……。軒夫は何か感じないか？」

不意に魔理沙が疑問を投げかける。

「何だか変だな。こう上の方が温いと言うか」

おかしい事で気圧や地表面の熱により、高くなればなるほど気温は下がるはずで。

暖かくなるとすればそれは俺達は大気圏を突破したと言う事になる。

幻想郷にて、それは信じるに値するかは未知数であるが。

「くさいぜ」

「あぁ、くさいな」

二人が見据えているのは雲、の先。

「いくぜ、暖かいなら飛ばしても良いんだろ」

「ちょっ、馬鹿、それは……ッ！？」

ギュインと音がなってもおかしくない軌道と速度で二人を乗せた箒は、雲を割っていく。

「ひゃっほーい！聖書に出れそうな気分だぜ」

「そんな状況言ってる場合か！危うく落ちるところだったわ！」

雲が全て割れた頃、階段があらわれる。
その先には門。

「へっ、ｈｅａｖｅｎ'ｓ　ｄｏｏｒだぜ」
「いや、ｈｅａｖｅｎ'ｓ　ｇａｔｅだ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8641t/

東方好嫌意

2011年10月13日03時49分発行